



桃源境ものがたり

石川鏡介

art:J・P・金堂

第一部 卷第一 第三章

(一)

はじめじめとした暗い洞窟どうくつの中で、明あきはしみじみと思つた。

(ああ、優しい子だよなあ)

おはるといふ娘のことである。

地獄に仏とはこのことだとも思う。

言葉に尽くせないくらいに壮絶さうげつないじめを受け、生きていてもつらいだけだ、こんなに苦しいなら生きていても仕方ない、死んだほうがいい、などと考へて、人知れず山奥の洞窟どうくつに入つて、自殺をはかった。それでも死にきれず、結局、意識が戻つてから出口を探して滝か何かに落ち、また意識を失つた。そして再び目を覚ました時、おれは不思議な世界にいたんだ。それは「落人おちうどの里」で、戦に負けて滅亡めつぼうした領主の一族やら家臣やらが暮らしていた。そこで俺は「神の子」と崇められた。

現実離れした成り行きに、こんなことなどありえないんだ、これは夢なんだろう、と思いつつも、里の人々の精一杯のもてなしを受け、それなりに喜び、浮かれましたものだったが、そんな生活は続かず、里が何者かの襲撃を受け壊滅かいめつ状態となつた。

途方に暮れた俺は山を下り、ふもとの里に出たが、ふもとの里では「鬼じゃ」と言われ、石を投げつけられ、追われた。そしてまたまた気を失い、目覚めたら土牢つちろうの中だった。鬼か、魔

物か、怪物か、といつて縛られ、牢に放り込まれたのだったが、夜になって、あの「おはる」という子が食べ物を持ってきてくれた。里人が人間扱いしない俺に、食べ物を持ってきてくれただけでなく、身の上話までも聞いてくれたのだ。

「ああ、あの子だけが俺のことを分かってくれるのか」
明はつぶやいた。

日が昇り、また沈んだ。村人たちが訪れることはない。

真の闇が訪れていた。

おそらく、村人たちは土牢の中で飢え死にするのを待っているのだろう。おはるが食べ物を与えているのを知らず。

明は土牢の外を見つめた。漆黒しつこくの闇で、何も見えない。月の光もさしていないようだ。おそらく曇りなのだろう。

ぐぐう、と腹がなった。珍しく空腹を覚えたのだ。

自分を縛り付けていた縄は、すでに解いた。岩壁にこすり合わせて、を繰り返して、岩の凹凸あつとこを見つけて、とがった部分を激しくこすり合わせ、その動作を果てもなく繰り返すうちに解けたのだ。

その動作の連続はさすがの明にも疲れを感じさせるものだった。

「ああ」

ためいきをつきながら、

「あの子、来ないかな」

と呟いた、その瞬間である。

土牢の外の、はるか前方に、小さな赤い光が見えた。

(なんだろう)

明の視線はその一点のみに集中した。

赤い光は徐々に大きくなり、近くのを照らした。光は松明の明かりだった。照らしていたものは、松明を持つ人の姿だった。

明は凝視し続けた。

光も人影も大きくなる。松明の光は二つとなった。その光は人物の顔を照らし、首から下のものも照らした。

顎にひげを蓄えた大男だった。甲冑姿で、右手には槍を持っている。槍の穂先が松明の光を反射していた。

「ホウ。アレガ、オニコトヤラカ」

甲冑武者がニタリと笑みを浮かべた。

その左ななめ後ろには何者か、黒い影が控え、武者に何かささやいている。

「ウム」

武者がうなずいた。

二人は歩を止め、また何か言葉を交わしている。後ろに控えているほうは地面に這いつくばるような低い姿勢で控えているが、これも手に松明を持っている。

大柄な武者がおもむろに振り向いた。

「ハヨウセイ！」

後ろに向かって怒鳴りつけると、

ザッ、ザッ、ザッ、と大地を踏み鳴らすような音が聞こえ、金属物がぶつかりあうような音も明の耳に届いた。

松明の光がもう一つ増えた。さらにまた一つ。

先に現れた甲冑武者に比べると武器が粗末ながら、一群の武士たちが現れた。

(なんだ?)

太い木の柱を組み合わせた格子に額を当てながら、明は目を凝らして外の様子を見ていた。

あの大柄な甲冑武者が先頭で、その背後に控えるように、十人ほどの武士たちが居並んでいる。その姿は歴史ドラマなどでよく見る「足軽」や「雑兵」といったような印象を持たせるもので、体つきも最初に現れた甲冑武者ほどたくましくない。

ガチャ!

闇がうごめいている。

足軽のような雑兵のような奴らのさらに後ろにも、まだまだいるらしい。松明の光が届かない為に、明の眼にはハッキリとは映らないが。

(なんだ、あいつらは。何しに来たんだ。俺になんの用があるんだ。顔を見に来ただけとは思えないが。それにしても、なんと、ものものしいことだ)

と明が思った瞬間、

甲冑武者を中心とする一群が一斉に前へと動き出した。

「オイ! オイオイオイ、オニコトヤラカ！」

歩み寄りながら、武者が叫んだ。

「オイ、キコエヌノカ！ヘントウセイ！」

よほどせっつかちな性質なのか、叫んでからほんの数秒も経っていないのに大喝した。その姿は、いったいどちらが鬼なのか、と言いたくなるほどのものだった。

「あ？なんか、用か？」

明自身が驚くほどの落ちついた声で、明は言葉を返した。

「フン。オニカ、ナルホドナ。ナントモ、フテブテシイヤツジャナ」

武者やその部下らしき兵たちがにじり寄る。

「フテブテシイヤツジャ」

「フテブテシイ」

武者の声をまねたかのように、後ろに控える兵たちがわめきたてた。

「オニジャ」

「オニ」

「ミヨ、アノカオ」

「アノアタマ」

いつの間にか、また、松明のあかりが増えていた。

光が強くなり、明の顔が赤く照らされる。

「アレ、ミヨ、ヘンナカオ」

「オニノカオジャ」

「アカイゾ」

明の顔を指さしながら、口々に罵る。が、明の目から彼らの容貌ようぼうこそ鬼や獣のものだった。

昔話の絵本などにある鬼の顔そのままと言いたくなるような男もいる。猿に似た顔の男もいる。ゴリラに似た顔の男もいるし、犬に似た顔の持ち主もいる。さらには狐に似た顔の持ち主やら狸に似た顔やら…。

（ああ、あいつはイノシシ。あいつは豚。あいつはフクロウ。

あいつは魚で、あいつはカラスか）

明は一人一人の顔を眺めまわした。

そして、鬼や獣に似た奴らが自分を「オニジャ」など言う馬鹿馬鹿しさに、思わず笑みを浮かべた。

それがまた獣たちを刺激する。

「ナンジャ、ワライオッタゾ」

「キモチワライ！」

「キモ！」

「ウザッテエ！」

「ウザイ」

「ウザッ！」

唾を飛ばして罵る。

その声と罵り方は、明の心の傷をほじくり返すにじゅうぶんだった。

「この野郎ども！」

土牢の格子を震わせて、明は罵り返した。

「お前ら、じぶんが人間らしいと思ってるのか」

「ハア？」

「おれはなあ、人なんだよ、ヒト。鬼でもなければ獣でもないぞ。おれから見たら、お前らこそ、獣だ。畜生だ！」

声を張り上げて叫んだ。

「ハア、ナニッテンダ。ヒトダトヨ」

「アレガヒトカヨ」

「ハハ、ハハハハハ」

「ハハハハ」

土牢の外では哄笑が響く。

明は腹の底が煮えたぎるのをどうすることもできない。

かつて、この世界に迷い込む前、自殺する覚悟を決めた「いじめ」の数々を思い出す。「もう、やめてくれ！」「やめろつたら！」「やめてくれ！」「やめろよ！」そう叫んでも繰り返された肉体的暴力と言葉による暴力。そして嘲笑、哄笑、冷笑。人を人とも思わぬ行為の連続。

思い出したくなくて、自分の命とともに消し去ろうとした悪夢のような光景がまざまざとよみがえる。

教室の、明の机に落書きをし、筆記用具を隠す、ゴミ箱に入れる、カバンに落書きなどは序の口。カバンや上履きを泥水に漬ける。羽交い絞めにしたうえで下着の中に虫を入れ、服の上から叩いて虫をつぶす。それを見て笑い、「うわー、こいつ、きもちわりーよ！」と叫び、大げさに笑いこける。さらにエスカ

レートし、床に押し倒して馬乗りになり、無理やり口を開かせ虫の死骸を入れようとする。トイレに連れて行き、顔を便器に押し付ける。プロレス技と称して二人がかりで抱え上げ、後方に投げ落とす。気絶したらその顔を踏みつけ、額に油性マジックで「にく」と落書きする。その上には「666」と書く。左ほほには傷痕だといって十字を書く。さらに上半身裸にして「胸に七つの傷だ」と言つてマークをつける、等。そのようなことをした者は大口開け、指をさして笑いこけた。周囲を遠巻きに囲んで野次馬見物していた者たちは冷たい笑みを浮かべて「あいつ、気持ち悪い」などと言う。そんなことがほとんど毎日続いた。

それが脳裏に鮮明な映像として映し出され、明は奥歯を噛んで土牢の外をにらみつけた。

格子をつかんだ彼の両腕は震え、頑丈そうな格子までが震えた。

「ホレ、ミヨ、アノチカラ」

「オニジャ。マサシク、オニジャ」

「ヒトジャトヌカストハ、シヨウシセンバン」

「オニイガイノ、ナニモノデモアルマイ」

獣たちは指をさしてあざける。

そのあざけりの声が収まったとき、

ザクツ、ザク！

大地を踏み鳴らして、あの甲冑武者がにじり寄った。

「グフツ」

明をまっすぐ見つめ、奇妙な声を上げた。

「オイ、オイ、オイ。オニノコ！」

指をさして呼びかけた。

「なんだ。……っていうか、鬼じゃないっての！ オニノコ、オニノコって、ツチノコみたいに言うな」

「オマエハ、アノ、ニシノヤマカラキタソウダナ」

「西の山？ ああ、あの山々のことか」

「マモノガスムトイウ、アノニシノヤマカラキタトイウコトハダ、オマエモマタ、マモノダトイウコトダ」

「ふん。そういう理屈か」

馬鹿馬鹿しくなつて、明はひるむことなく言い返した。岩を割ったり砕いたりする力が得られたり、崖から落ちても気絶するだけだったとか、火を投げつけられて大やけどしないとか、川にのまれても溺れ死んだりしないとか、何日間も飲まず食わずでも飢え死にしないとか、そのようなことが「おれは不死身なんだ」「なにがあっても平気だ」という自信をつけさせ、腹が据わってきたのか、と自分自身で思う。

（やっばり、なにも知らないんだ。こいつらは）

心の中で、甲冑武者らをあざ笑った。

「オイ！」

いらいらした様子で武者が怒鳴りつけた。

「オマエノイウトオリ、オマエガヒトダトシヨウ。デハ、オ

マエハ、アノヤマデ、ナニヲミタ」

「……」

「オニヤマモノガスムハズノ、ヒトナドスメヌハズノ、アノヤマデダ」

「……」

明は口を開ざした。うかつに喋ってはまずいことになると思感じたのだ。

「カクレザトカ」

「……」

「ホロビタハズノ、カツイケジョウシユ、キダ」

「！」

「ソノ、キダノモノドモノ、カクレザトデ、オマエハ、カミノコナドトイワレ」

「あつ、なぜそれを」

明は思わず声を上げた。

「まさか！」

こいつらの想像か。いや、そうではない。おはるが誰かに伝えたのがこいつらの知るところとなったのか、俺とおはるの会話を誰かが立ち聞きしてこいつらに伝えたかのどちらかだ。

「ヤハリナ。オマエハ、カツイケジョウノキダノザントウトカワツタノダナ」

そして甲冑武者はまた「グフツ」と奇妙な笑い声をあげ、

「カツテハ、オオガカリナザントウガリガ、オコナワレタモ

ノダツタガ、イキテモドツタモノハ、ヒトリモイナカッタ。イライ、アノヤマハ、『マモノガスムヤマ』トイワレタ。オタカラヲサガスモノモ、ナクナツタ。オタカラノユクエモ、ヨウトシテシレズ」

「なに？ お宝？」

「シカシ、ザントウガアノヤマニイタトナルト」

また「グフツ」と笑う。

「オタカラハ、ザントウドモガカクシタ。アノヤマノドココニアルトイウコトダ」

「な、なんのことだ」

明にはわけがわからない。

「オマエ、ソノアリカラシツテイルダロ！」

「知らぬ。なんのことだ」

明の返事が終わるか終らないうちに、甲冑武者はうしろを振り向き、部下どもに言った。

「アノコムスメヲツレテコイ！」

(二)

明は獣のような武士団の奥に視線をそそいだ。

一群がゆれ、道を開くように左右に動く。門扉もんびでも開くように隙間すきまができて、そこから一人の武士が誰かを縛らしきもので引つ張つて来る。

「あつ！」

明は思わず声を上げた。

引つ張られていたのは、後ろ手に縛られた若い女だった。獣のような武士団の松明によって映し出された女の髪は焼けたかのようにチリチリに縮れ、顔は炭でも塗つたように黒くなった部分と、あざのように赤黒くなった部分とがある。そして着物もボロボロで、破れ、擦り切れた部分も多い。なんとも、目を覆いたくなるような姿だった。

明は息をのんだ。

「おはるさん」

間違いない、おはるだった。

「そんな。おはるさんが」

力なく呟いた。

それを見て甲冑武者が言う。

「コノコムスメノ、オサナナジミトヤラガ、ワレラノモトヘキテ、イッタノダ。ムラビトガオニコヲトラエタ。ソノオニコ、オハルニダケハココロヲユルシ、ナンデモシヤベルヨウダガ、ソノオニコガイウニハ、ニシノヤマノナカノサトカラキタト」

明にとっては、これこそ悪夢のようななりゆきだった。自分と関わった者はことごとく命の危険にさらされ苦しむのだ。

「コノコムスメヲゴウモンニカケ、セメタ。ダガ、ナニモシラヌトヌカス」

「……」

「ナラバ、オマエニトウシカナイ。キダノザントウハ、テンカニミツツアルトイウ、ソロエバテンカノハシヤニナレルとイウタカラノヒトツヲ、モツテイタハズダ」

「なに。三つの宝？ 覇者？ なんだそれは」

「トボケルナ！」

甲冑武者の怒鳴り声が響いた。

「オマエハ、コムスメニメシヲモライ、コムスメニハナンデモハナスヨウニナツタヨウダナ！」

おはるを引つ張つてきた武士が縄を引いた。おはるを縛り付けている縄の端からぐいと力任せに引いたのだ。たちまち、おはるの身体が前のめりに倒れる。おはるはもはや歩く力も無いらしく、気絶寸前のような。

「くそっ」

明に新たな怒りが湧き上がってきた。

「サア、タカラノアリカライエ！」

「し、知らぬ」

「イエ！」

「知らぬものは知らぬ。それより、その縄をほどけ！」

「イエ！ イワヌカ！」

「イエ！」

「イエイ！」

「イエ！」

「イエ！」

詰問している甲冑武者ばかりか、それにしたがう獣のような武士団も叫び、「言え！」の大合唱を始めた。

「イエ！」

「イエ。サモナイト」

甲冑武者が刀を抜いた。

刃をおはるの体に当てる寸前のところまでもってきた。

「コノ、コムスメヲ、サシツラヌク」

「やめろっ。やめろおーっ！」

明は力の限り叫んだ。

宝など知るはずもない。だから言うも何もないけれども言わなければ、おはるは死ぬ。無惨に殺されるだろう。助けようにも目の前は土牢の固い格子がある。

絶望的な状況である。

「タダノオドシデハナイゾ。ソレトモ、オニコユエニ、コノコムスメヲ、ミゴロシニスルカ？」

「ああっ」

甲冑武者の手が動き、刀を振りかざした。

「だめだっ！」

逆上した明は、力いっぱい、格子を揺さぶった。

格子が激しく動いた。

（そうだ。おれは岩を割ったんだ）

気づいた明は拳を固め、格子を殴りつけた。

鈍い音が鳴った。

「ナンダ？」

「オニガ、アバレテイルゾ」

獣のような武士たちがざわついて、口々に言う。

格子の木材は割れない。砕けない。土牢はちよつとした洞窟になつているが、その入り口の岩の両脇にちよつと凹みがあり、凹みに材木をはめ込むかたちになつてゐるらしい。だから、ちよつとやそつとの力ではビクともしないのだ。

奈落の底へ落ちて行く思いになりながら、明は格子を殴り続けた。

それを見て、甲冑武者が口を開く。

「キガカワツタ。コノコムスメハ、ナブリゴロシダ」

刀を鞘に納めると、

「ソレ、コムスメノ、キテイルモノヲ、ハギトレ！」

部下どもに顎で命じた。

獣どもはいっせいに、おはるに群がつた。

「やめるおーっ！」

明は怒りで完全に我を忘れた。

気が付いて我に返つたとき、格子の木材は粉々に、いや、無数の木っ端ばとなつて足元に散乱してゐた。少し離れたところには杖ほどの長さのものや太鼓のバチほどのものも数個あつたが、ほとんどは小さな木っ端となつてゐた。

明は目を見開いた。

前方には、獣のような武士群。その中心には、着物をはぎ取

られて全裸に近いおはるの姿。

「オオ、オニジャ。オニガクル」

おはるに群がり、彼女をなぶり尽くそうとしてゐた獣どもが恐れおののいでゐる。

「オニジャ」

「オオ、オニジャ！」

彼らは、あとじさりを始めた。

「ナニヲシテオル！」

甲冑武者が叫んだ。

「ヒルムデナイゾ！」

また刀を抜いた。

「ヤヲハナテ！ イコロセ！ オニノコナド、ナニホドノコ

トヤアル。ヒルムナ！」

怒声が周囲にこだました。

ひるんでいた獣どもが気を取り直したように弓を構え、弓を持たぬ者は大刀や槍を構えた。

明は足元を見た。散乱してゐる木っ端の中から、太鼓のバチ程度の大きさの物ふたつを両脇に挟み、杖ほどの長さの木切れを持つた。

身体じゆうが熱い。明は力がみなぎつてゐるのを感じた。

(こいつら、許さん)

木切れを握りしめ、突進した。

弓矢が一直線に飛んできた。

「なんの！」

明は木切れを振り、払いのけた。自分でもなんでそんなアニメのヒーローのような芸当ができるのか分からない。とにかく必死だった。

「この野郎ども。もう、おれはいじめられっこなんかじゃねえぞ。怖いものなんかねえ！」

叫び、目の前に迫った敵の一人を大きなほうの木切れで殴り倒した。

「ウガッ！」

断末魔の悲鳴が上がった。

「オニジャ、オニジャ！」

「このっ！」

また、別の敵を殴る。ふたたび断末魔の悲鳴があがる。

敵集団の一角が崩れた。

一度よけた甲冑武者が横から斬りつけてきた。明は慌ててよけた。刃をかわし、甲冑武者の利き手の肘を大きな木切れで撃つ。

「ア、ガ！」

武者の刀が地面に落ちた。

「オニメ！」

「くたばれ！」

肘の痛みには耐えかねてうずくまろうとする甲冑武者の頭を木切れで殴りつけた。

兜が割れ、木切れが割れた。明自身にも信じられない怪力だった。

「ウワー！」

「ヒトデハナイワ」

「オニメ、オニメ！」

甲冑武者の部下たちが腰を抜かした。そして震えながら罵声を明に向けた。

「オニー！」

「オニジャ」

「オニジャ！」

明は木切れを振り上げて甲冑武者に襲い掛かった瞬間に、両脇に挟んでいたバチ状の短い木切れを落としていたが、すぐに拾い、右手の方へ駆け出した。

「ワッ！」

「アレッ！」

「オニガキタゾ」

槍を構えていた者たちは慌てた。槍の部隊は左側からの攻撃に対応しづらく、「鬼」と恐れる相手の襲撃となればなおさら動揺するのだ。それはまさに「恐慌をきたした」といってもいい状態だった。

「コワイ！」

「ヤラレルナ、ニゲロ」

動揺しながらも明に向かっていた集団の一角が崩れた。

「ヒイ！」

明は背を見せて逃げる敵の一人の槍を奪った。ただでさえ、大将をやられて胆をつぶしている群れである。恐慌はますます酷くなった。

松明が乱舞した。

明の息は大荒れに荒れた。

「この！」

猿のような顔の兵をバチで殴りつけた。

「この野郎め！」

狐のような顔の兵をまたバチで殴りつけた。

「ちくしょうめ！」

犬のような顔を殴る。

「くたばれ！」

ゴリラのような顔の兵を叩きのめす。

「ギヤッ！」

次は豚のような顔に一撃。そのたびに断末魔の悲鳴が上がり、血煙があがった。

気を失ったり絶命した兵たちが地面に横たわる。

松明が少しずつ消え、闇が濃くなった。

明の視界から外れた兵は一目散に逃げていく。

「ア、ア、アワワワワ」

口から泡吹いたり血を吐いたりして横たわっている兵たちの中に、ただひとり、武器もつけず武器も持たずに腰を抜かし

てガクガクブルブル震えている者がいた。近隣の農民の若者らしい姿に、明の新たな怒りが湧き上がった。

「きさまが密告したのか！」

「ヒ、ヒ、ヒイツ！」

若者が甲高い声で悲鳴を上げた。

明はその口を力任せに蹴り上げた。

わずかに残っていた兵たちも、その光景をみて逃げ出した。

松明は一つもなくなった。

ついに、目の前には何も見えなくなった。

「……」

明はしばらく、呆然と立っていた。やがて、月の光がさしかけた。それまで雲に覆われ、月の光がさしていなかったのだ。

周囲を見回した。

兵の死体の中に、おはるの姿があった。

「おはるさん」

おはるに駆け寄り、彼女の頬や耳、手足などに触れる。感触をたしかめた。

冷たい。

（なんなんだ、死んでいるのか？）

そう思いつつ、脈を確認する。心臓の動きは止まっていなかった。脈打っているのに冷たいのは、夜の冷気に触れたからなのか。

（いや、ちがう）

隠れ里で出会った「おゆみ」という女にも体温を感じなかった。だから、おはるに体温を感じないのも不思議ではない。

「ううっ」

おはるの口から声が漏れた。

「おはるさん！」

明はおはるの耳元まで唇を近づけ、声をかけた。

ひどい拷問にあつて、さんざん痛めつけられたのだろう。気絶する寸前にここまで引つ張られ、かろうじて歩いてきたが、限界にきて倒れたのだろう。いたましい姿だった。明は慌てて着物を着せた。

息を吹き返したおはるだが、目はまだ開かない。呼吸があるものの、弱い。

「なんとかしなければ」

明は力任せにおはるの上半身を起こし、彼女の腋を自分の肩にあて、彼女を背負った。

重いと感じた。それはおはるの体重のせいではなかった。

(三)

明は土牢のあつた小山を下りた。

月明かりのもと、おはるを背負って坂を下りるのには苦心した。それでも「ここにいつまでいても仕方ない。村へ行って、手当てをさせなければ」との一心で歩いた。

小山を下りきった時、東の空が白くなってきた。

もう、夜が明ける。

前方には雑木林ぞうきばやしがあつた。その林を抜けると川があつた。川には小さな木製の橋がかかっていた。

川の向こうに一筋の煙が上がるのが見えた。朝のメシを炊く煙だな、と明は思った。煙のもとに集落があるらしい。

おはるを背負って、慎重に足を運びながら橋を渡った。

村に近づくごとに煙の数が増えた。二すじになり、三すじになり、四、五、六……。

そして村に入った時、一軒の家の戸が開き、中から一人の男が出てきた。

男は明と目があい、立ちすくんだ。目が大きく見開かれている。

「アッ」

それから何も言えない。

声を聞きつけたのか、家の中からもう一人出てきた。

「ン？ ドウシタ」

その者も明を見て立ちすくむ。

「ア、ア、オニ。オニジャ」

「オニジャ！」

叫び声が上がった。

「ナニ？」

聞きつけて、別の家から人が出てきた。

「オニジャ。オニジャ」

騒然となった。

複数の家から、鎌や棒切れを持った男女が出てきた。

「オニジャ。オニガ、ロウカラデテキオツタゾ！」

「ムラノイチダイジゾ！」

「コロサレル！」

「オシロノサムライタチハ、ドウシタノジャ」

「ミナ、ヤラレタノカ」

「ロウカラデテ、サムライタチマダオストハ」

「マサニ、オニジャ、マモノジャ。カイブツジャ」

村人たちは明を指さして声を上げる。

「ナニカ、セオツテイルゾ」

「オハルジャ、アレハ」

「オハルジャ。ナゼ、オハルガ」

騒ぎはますます大きくなった。

「落ち着いてくれ。おれは、おはるさんを」

言いかける明に罵声が飛んだ。

「オハルヲナブリモノニシタカ。オニメ！」

「ドースルツモリジャ」

「オニメガ！」

明は慌てておはるの身体を地に降ろし、村人たちを手で制して、事情を説明した。

「……というわけなのだ。だから、おはるさんの手当てを」
だが、村人たちは聞く耳を持たない。

「オニノウコトナド、シンジラレルカ」

「シンジラレルカ！」

「ウソジャ」

「う、嘘ではない。本当なのだ」

「ウソジャ。オニメ！」

「モシ、ホントウダトシテモ、オニノウコトヲキイタラ、

ワレラガオシロノサムライタチニ」

「ソウジャ、ワレラガ、オシロノサムライタチニ、ヒドイメ

ニアウノダ」

「ヤクビョウガミメ」

村人たちは口々に言い、明に憎しみの目を向けた。

「おう、そうか……」

明は力無く呟いた。

「信じてはくれないのか。やはり」

その背中に何かが当たった。

石つぶてだった。

あの、初めて村を訪れた時と一緒だった。

「デテイケ！」

「オニメ。デテイケ」

また石が飛んできて明の背中に当たった。さらに、背中だけでなく、肩にも腰にも当たる。

明は振り向いた。その瞬間、額に直撃した。
彼は何も言わず、額を抑えてうづくまつた。

「オオ、イタガツテイルゾ」

「アタツタゾ」

「モットナゲロ。モットダ」

ぶんつ、と音をたてて、横からも飛んできた。

明は正面をにらんだ。

「ウツ」

村人たちが後じさりする。

「オイ、オニガイカリクルツタラ、コノムラハ、ゼンメツダ

ゾ。ナニシロ、オシロノサムライタチヲ」

「ウウ、ソレモソウジャ」

村人たちがざわめき、

「オコラセルナ」

「サワラヌナントヤラニ、タタリナシ、ジャ」

「ヤマヘカエレ」

「カエレ、カエレ」

「カエレ、カエレツ！」

いつしか「帰れコール」が始まった。

「……」

明はにらみ続けた。どうしてこんな目に合わなければならな

いんだ、と、やるかたない思いだった。

「帰るところなどないんだ」

そう。帰るところさえあれば、こんな悔しい思いはしないん

だ。そう心の中で呟いた。

（帰るところさえあれば。しかし、おれは自殺を凶つたくらいだ。帰るところなど、どこにもない）

明は振り向き、西の空を仰いだ。

その時である。

「イツソノコト、コノオニメガ、ヨダノオシロニノリコンデ、

シロノサムライドモトタタカイ、アイウチニデモナレバ」

村人のうちの誰かがそう呟いた。

「何？」

背後からの声だった。明はまた振り向いた。先ほど見ていた

方向を再び凝視した。

「シツ。ナニライウカ」

慌てて制した者がいる。

「オニヲタキツケタナドト、オシロノモノニシラレタラ、ド

ンナオソロシイコトニナルカ」

声を震わせて言う者があった。

「そうか。そんなに支配者が恐ろしいか。ならば、俺がやつ

つけてやるよ。おはるさんをこんな目にあわせたのも、隠れ里

の『お方様』たちを西の山の中に追いやったのも、みんな夜田

氏とやらなんだろ。ちくしょうめ。やってやるって」

明は自分の力を誇示するかのように、拳を固め、伸ばしてい

た両腕を曲げて、格闘家のファイティングポーズのような構え

を見せた。

村人たちが身体をはげしく震わせる。

「ウ、ウウツ」

「オソロシヤ」

「ああ、俺には帰るところなどないんだ。だから、何も怖いものなどない。おはるさんをこんな目にあわせた奴らはみな、やつつけてやる。牢の前に来た連中だけじゃない。みんなだ。みんな」

明は村人たち一人一人を見回した。もう、彼に向かつて石を投げる者などいなかった。

「夜田の居城とは、どこにあるんだ？」

詰問するように、はげしい口調で言った。

村人たちは口をつぐんだ。自分たちに累おとが及ぶのをおそれているようだ。

「言え！ どこだ！」

明が叫んだ。いじめられっ子だった自分がどうしてこんなに強気になるのか、と明自身不思議に思うほど、強い、腹の底からの声だった。

「ヒイツ！」

悲鳴を上げながら、村人の中の一人が東の方角を指さした。その震える指をつかみ、降ろそうとする者もいる。が、東を指さした者は東を向き、

「ヒ、ヒガシノ、ヒガシノ、カワゾイノコヤマジヤ。ソコニヨダノ」

と言った。

その者が反射的に指さしたこと。別の者が慌てて制して指を下ろそうとしたこと。それが真実を語っているようだった。

まちがいない、東だ。そう判断した明は、東に向かつて歩を進めた。

たちまち、明を取り囲んでいた輪が崩れた。東側の村人たちは左右に動いた。こうして東への道が開かれた

明は肩をそびやかして進んだ。そして近くにある家の扉に立てかけてあつた丸太ん棒を取り、

「これはもらつていく。武器になる」

握りしめながら、少しだけ振り返り、

「おはるさんを頼む」

そう言つて、歩く速度を上げた。

彼に対して石を投げる村人はもういない。

東の空にのぼつた太陽が彼を強く照らしていた。

(四)

歩きながら、明は考えた。

あの土牢の前に現れた甲冑武者やその部下たちは「お宝」とやらを探していた。宝は三つあるという。一つは鬼田の残党が持っているはずだと奴らは言った。お宝が三つあれば覇者になれるとも。それはいつたい、どんな宝なのか。

(そういえば)

当然のように思い出したのが、「隠れ里」を襲撃した黒い集団のことである。あの集団も何かを探していたようだった。その「何か」とはお宝のことなのか。いや、そうに違いない。

「ならば」

明はつぶやき、ひとり言を続けた。

「あの黒い集団は誰の命で動いたのか。あいつらが宝を探していたとして、それが見つからなかったならば、隠れ里の存在も、隠れ里の中にお宝とやらが無かったことも、夜田の将たちに知れ渡るはずだ。土牢の前に来た連中が夜田の将とその配下のだから、隠れ里を襲った連中の動きも知らなくてはならないが」

そこまで言って、首をひねった。

「隠密の行動だから知られていないというのか？ それとも、お宝とやらは、お方様の住まいとは別のところにあつて、あの黒い集団が見つけて……。いや、そんなはずはない。見つかっているなら、あの土牢の前に来た連中がわざわざおはるさんを拷問したり、おれのところへきて問いただすこともないわけ」

いろいろ考えたが、答えは出ない。ただ、夜田の城に潜入して聞き出すか、村人に言ったように『やつつけて』夜田の将を倒して、奴らがおはるにしたように拷問でもして問い詰めるしかないようだ、と彼は考えた。

「まあ、この姿ではまた『オニ』などと言われて、潜入もで

きないだろうがな」

自分の身を振り返り、またひとり言をつぶやいた。

それからどれだけ川沿いを歩いたろうか。はるか前方の川向うに、なだらかな稜線の小山が見えた。そのふもとにも、中間にも、頂上にも建物がある。村人が言った夜田氏の支城に間違いなかった。

明は川のふちに立った。

小山に築かれた城がよく見えた。山の下に城門があり、そこから真っ直ぐ道が伸びており、少し先の川べりに架かった橋へと続いている。

門はかたく閉ざされているようだ。その上には幾つもの櫓がある。櫓の近くには夜田家の家紋を描いた幡らしきものが幾つもち、風にたなびいていた。

隠れ里の人々にとっては本拠地を襲い「鬼田氏」を滅ぼして山の中に追いやった「かたき」の片割れであり、明自身にとっては優しい情をかけてくれたおはるさんを苦しめた「かたき」の片割れでもある夜田の者どもがいる城だ。

「さて、どうしてくれようか」

城を見つめる明の目が鋭さを増した。

どうしようか、といったものの、策があるわけではない。怒りにまかせて暴れ、土牢前に来た者どもを全滅させたが、一人の力で本当に城を壊滅させられるかどうか、わからない。

だが、やるしかない。そう思った。

と、その時、

ギ、ギギイッ！

厚い木の門扉が開く音が鳴り響いた。

明は目を凝らした。

開いた城門から、騎馬武者が現れた。その後、甲冑武者、兜をつけていない武士が続き、最後に軽装の雑兵らしきものが続いた。

先頭の騎馬武者の馬の口取りらしき者が早くも明の姿を見つ、指さした。

「ア！」

甲高い叫び声を上げる。

「アレジャ。アヤツジャ」

明を指さした者の声により、城から出てきた兵たちの視線がいつせいに明へと注がれた。

「ロウヲヤブツタ、オソロシイオニニゴザル！」

雑兵らしき者たちの中から、一人の男が進み出て叫んだ。

「あいつは」

明には見覚えがあった。土牢の前にいた、狸によく似た顔の兵だ。

「オニメ」

「オニ！」

「ココマデキオツタカ。メニモノミセテヤル。オニトハイエ、

テキハヒトリゾ」

色めき立つ様子が川を挟んで対峙する明にもハッキリ分かった。

「ソレ、カタキヲオセ！」

先頭の騎馬武者が号令し、後に続いてきた甲冑武者やその配下らしき兵たちが突進してきた。

「オニメ！」

彼らは川を渡るうと、激流の中に入った。

後ろの隊は橋の方へと移動した。うかいして明の背後をつくとみえる。

「来るか」

明は威嚇するように丸太ん棒を振り回した。

さすがに名のある将とみえる。騎馬武者は大きな声で号令を続け、先頭の甲冑武者は吠えながら川の中を進んだ。

明は岸で待ち構えた。

「この！」

川の流れに足をとられそうになった先頭の武者の横面を丸太で殴りつけた。

一撃をくらった武者が倒れ、水しぶきがあがった。

ザブッ！

撃たれた武者が下流へ流されていく。後続の兵が明のいる岸に迫る。明がその兵の頭を叩きのめす。また水しぶきがあがる。また兵が流される。

そのうちに、うかいした兵たちが明の横や背後から襲おうと追ってきた。

明は西へ向かって走った。

「オニメ、ニゲルカ」

夜田の兵たちが叫んだ。

明はさらに走った。追う兵たちの速さにばらつきが目立ってきたその時、いきなり振り返り、先頭の兵を丸太で力任せに殴り倒した。

その勢いで一回転し、態勢を整えると、野球の打者のように構えて、第二の敵を待った。

そこは広い草原くさほらだった。見通しがきくため、敵の動きが手に取るように分かった。

敵が迫る。明は間合いを測り、ここだ、というときに本塁打を狙うかのように振り回した。

「グワ！」

鈍い音とともに、うめき声が上がった。

「カカレ！」

「ススメイ。ヒルムナ！」

部将らしき者が声をからして叫んでいる。

明の側面や背後に回ろうとした兵も、結局、正面から突撃してきた隊に合流した。小勢でかかると怖いが大勢でかかれば怖くないという心理なのだろうか。

「策も何もない奴らだな。まあ、おれだって、これといった

策があるわけじゃないが」

明は微笑みを浮かべ、丸太を振り回した。

「オニガ、ワラツテイルゾ」

「ウウツ」

突進してきた兵たちの足が停まる。彼らには不気味な笑いに見えたのだ。

「ヒルムナ！」

「オニタイジヤ！」

騎馬武者が川を渡り、部下たちを叱咤している。

「来いや！」

かつていじめられていた鬱憤うづがんをここで晴らそうとするかのように、「自分は不死身だ」「それこそ鬼のような力を得た」と確信した明は、自信に満ちた声で敵にたいし対峙した。

背後に騎馬武者が迫ってきて叱咤しているのを知った兵たちは槍や刀を構えなおして明に向かってきた。

明は敵の一人の顔を丸太の先で突き、すぐに引いてまた突きを繰り返してもう一人の咽喉元を突いた。さらにまた別の兵の下あごに狙いを定めて突いた。

「ウヌ。ユミジャ。ユミヲカマエイ。ヤヲハナテ！」

騎馬武者が命じた。

弓隊が進み出て、矢をつがえる。

「これは」

矢の雨が降ってきた。たまらず、明が背を向けて走った。

「オニメ。ユミヤニヨワイトミエル」

騎馬武者がほくそ笑み、また矢を放つよう命じた。

「ハナテイ！」

大音声が響いて無数の矢が放たれたその時である。

ガツガガ、ドオドドオオオン！

橋のあたりですさまじい音が響いた。

「な、なんだ？」

明は目を見開き、橋の方を見た。が、遠すぎてよく分からな
い。

「ナニゴトゾ」

敵兵がざわめき、明そつちのけで背後をみている。動揺が広
がっているのが明にも分かった。

「ハ、ハシガ！」

「ナニ？」

「ハシガ、コワレマシタ。イヤ、コワサレマシタゾ！」

「ナ、ナント」

「タワケタコトヲヌカスナ」

騎馬武者が鞭を振り上げ、「ハシガ……」と言った部下を叱
りつけたその時、今度は城のある山の頂上から煙があがった。

そればかりではない。夜田氏の家紋らしきものが描かれたあ
の大きな幡が倒され、代わりに別の幡が立てられたのだ。

「アレハ」

「マサカ、シロガ、ノットラレタ？」

兵たちは驚きあきれ、ぼうぜんとしち尽くした。まさに「恐
慌をきたしている」という姿そのものだった。

もちろん、明にも何事が起きたのか分からない。見当もつか
なかつた。

「ト、トニカク、ユミタイハ、オニメニ、ヤヲハナテ。ノコ
リノモノハ、ヒキカエセ。カワヲコセ。シロヘムカエ。シロヘ」
騎馬武者が声を震わせて言う。

半ば戦意喪失しながらも、騎馬武者に率いられた兵たちは川
に入った。そこから城へ向かおうとしているのだ。そして、残
った弓隊は弓を引き絞っているものの、矢を放てないでいた。
顔は青ざめ、手は震えている。動揺が大きすぎるようだ。

一方、城からは「えい、えい、おう！」と、ときの声が起こ
った。明は「あれ？」と首をかしげた。戦っていた兵たちや村
人たちとは声の質が違ふと感じたのだ。なんとなくなつかしい
ような、どこかで聞いたことがあるような、そんな響きの声だ
った。

「何が起こったか、見極めてやろうじゃないか」

明は前進した。

「ヒイ！」

戦意喪失した弓隊は、弓を捨てて東へ走った。

明はそれを追う。

追ううちに、橋の様子がよく見えた。橋は、橋げたの部分だ
け残して、あとはことごとく流されていた。

視線を移して城を見た。城門が開かれ、中から、白い頭巾をかぶった一団がとび出してきた。

「な、なんだ、あれは」

さらに近づき、目を凝らして見る。

白頭巾の一団は川べりまで来て、川岸に並び、一斉に弓を構えた。

夜田氏の隊は川のふちに飛び込んで進もうとしたものの、先に進めない。進退窮まったかたちだ。

「放て！」

何者かが叫んだ。白頭巾集団から矢が放たれ、夜田隊に矢が降り注いだ。

白頭巾隊の側は浅瀬になっている。夜田隊がひるんだのを見て、白頭巾隊の弓隊が動いた。右側の者はさらに右に動き、左側の者はさらに左に移動した。すなわち、道を開くように真ん中を開けたのだ。

「槍隊、突撃！」

さきほど叫んでいたのと同じ声が号令をかけた。その声が響くと同時に、隙間ができた真ん中から、槍を持った隊が突進してきた。槍隊は川の真ん中まで進み、深みで進退きわまつている夜田隊に突きを入れた。

「ギャ！」

「ウグエ！」

断末魔の叫びがあがる。

あの騎馬武者は川の岸の手前に留まって城頭巾の一団の動きを「ウヌヌ」とうめきながら見ていたが、やがて、

「ムネンジャ。モハヤ、コレマデ」

そう言うと、鞭を東へ向け、

「ホンタイト、ゴウリュウスルシカナイ。ヒガシへ、ヒガシへハシレ。ソレシカナイ」

自ら先頭にたつて馬に鞭をいれた。彼の部下たちは慌ててその後を追った。

「よし！」

川の向こうから、白頭巾たちの歓声があがった。

「えい、えい、おう！」

ときのかえをあげる白頭巾たちの動きから、明は目を離さなかつた。中から一人の大柄な男が進み出てきた。明はその男の顔を見て「あっ！」と叫んだ。

その男は双眼鏡らしきものを持っていた。

(第四章へとつづく)